

第三章 日本人の死生観の変遷

死は魂がどこかへ行くこと

現在の葬儀、墓、エンディングノートなどへの私の問題意識がなにゆえ生まれるのかといえば、日本人が長いあいだ抱いている死生観にどこか合わないものを感じるからです。ネオ・リベラリズムの激流の中で、我々は日本人の根ともいえる大事なものをどこかに置き去りにしている気がしてなりません。

今、暮らしの中には何でも外国製のものが取り入れられていますが、日本人はそもそも、死というものを古来どういうふうにとらえていて、どういう看取りやターミナルケアを行なってきたのか。まずは『古事記』や『万葉集』などを検証して考えてみたいと思います。

「死生観」という言葉は、一九〇四年に初めて登場した非常に新しい言葉です。加藤咄堂（ちやうどう）という仏教家の『死生観』という本によって世に出た言葉でした。

はじめに、死生観という言葉がまだまったくなかった時代の日本人の死生観を検証してみたいと思います。

現存する最古の書籍である『古事記』、あるいは最古の歌集である『万葉集』、これらはともに奈良時代のものですが、眺めていきますと、そこに「死」という言葉は出てきません。では、人が死ぬことをどう書いてあるか。「避難」などという言葉に使われる「避」という字を書いて「避る」と書いてあります。読みは「さる」です。このことから「ここを避けて、どこかへ行く」というようなイメージが浮かびます。死んでいなくなるというより、どこかへ行ってしまう印象だったことがうかがえます。

どこかへ行ってしまう。では、何が行くのかといえは「魂」がです。魂というのは、生きているときには身体と一体となっていますが、死んだら魂だけがどこかに行くということなのです。和語としての「たましい」は、丸くて（たま）よく動く（しい）ものという意味ですが、そんなふうにならぬ人々は感じていたのでしょうかね。

そもそも、「からだ」という言葉は、もとは魂が抜けた「からっぽの状態」を意味する言葉です。そこに魂が入っているいろいろな生命活動をしている、と考えます。

万葉時代の枕詞まくらことばに「たまきはる」という言葉があります。主に「命」の枕詞ですが、これも「たま」が「来」て、からだが「張る」のです。からっぽではなくて、満ちた状態が命であると考えていたことがわかります。

奈良時代の頃の日本人にとって、死というのは、たとえば草が枯れても次の年の春になるとまた生えてくるようなもの、時が来れば避る（さる）ものでした。日本の湿润な天候の中でこそ根付いた、独特の死生観だと思います。

「憑依」を信じる日本人

ちなみに、この元はからっぽである「からだ」という考え方こそ、「憑依ひょうい」に関わる文化のベースになります。日本人はどの程度意識的かは別にして、「憑依」の現象を明確に信じています。

「憑依を信じる」と表現すると、「お化けなんて信じないぞ」などというように、「お化けや憑つきものがついている」状態ばかりを想像されるかもしれませんが、そういうものもあります。もう少し広い意味で「依り代よりしろ」という考え方で成り立つ日本文化に眼を広げてほしいのです。それらはすべて、憑依を信じていなければ成立しません。

お正月に飾る門松にしても、今ではただの飾り物という認識が主流かもしれませんが、そも

そもは歳神さまが降りてくる依り代として置いたものでした。松を「まつ」と訓むのは神さまを「待つ」木だからです。

神棚や仏壇なども同様です。神棚に手を拍つのも、仏壇に手を合わせるのも、そこに依り代があるからです。神棚には神体や神札、仏壇には仏像などを置いてそれを拝む。あるいは、故人が宿るお位牌を拝む場合も多いでしょう。間違いなく日本人は、そこに「霊」が宿っていると思うから拜んでいるのです。

仏教伝来による「死」との出会い

話を死生観に戻します。死とは「どこかへ行くこと」「避ること」であったこの国に、やがて仏教が入ってきます。仏教伝来は飛鳥時代のことです。五五二年だと言われていますが、諸説あります。間違いなく、公伝とされる年よりは早く伝わっていると思います。そして仏教伝来により、「避る」のではなく「人は死ぬのだ」という考えが入ってきて、日本人は初めて死というものに出会ったわけです。

インドで生まれた仏教と日本に渡ってきた仏教とは、一つ大きな違いがあります。「輪廻」という考え方がとり外されていたところでは、なぜなら、祖先崇拜の強い中国人にとつては先祖に豚や牛がいるというのは絶対に許せないことで、中国ではどうしても輪廻を認めるわけに

はいかなかつたからです。大議論のすえ、輪廻という考え方は中国で外されて日本にやつてくることになりました。

インドでは身体が死んでも、輪廻によって魂が次の身体を獲得すると考えます。ですから、死によつて身体はからつぽになるので、燃やしてしまつてもまつたく問題はありませぬ。そのような考え方のもと、仏教とヒンドゥー教が世界でも稀な火葬という埋葬法を採りました。ほかに火葬の習慣があつたのは、古代のゲルマン民族くらいでしょうか。

仏教とともに日本にも火葬が伝わりましたが、その際輪廻という考え方は外されていましてから、理論的には非常に不備でした。輪廻なしの仏教に死後の保証はないわけですから、なぜ遺体を燃やしていいかの、裏付けがなかつたわけです。ですから火葬が承服できず、抵抗があつたのも頷うなずけます。『日本靈異記』などには火葬を嫌がり、「腐くさるまで燃やしてくれるな」「九日間は燃やさないでくれ」などというような貴族の言葉が多くあり、火葬を非常に認めにくかつた心情が読みとれます。

浄土を発展させた「あの世」

仏教伝来によつて日本人が「死」と出会つたのに次いで、七世紀前半には中国の浄土教じやうじゆうが入つてきます。浄土教では死をどうとらえるかといえは、「死ぬおちというけれども、それは往生おうじやうで

すよ」と考えます。「往生」という、その文字のまま、どこかに往って生きるのです。往って生きるということであれば、万葉時代の「避る」のと似ています。もともと日本人がもっていたイメージに非常に近い考え方が「往生」と言葉を更新たにして、浄土教によって表現されたわけです。

こうして仏教の「死」に浄土教の「往生」を取り込んだ、日本独特の死生観が展開していきます。もつとも、日本人は浄土教の考え方をそのまま受け入れたわけではありません。その証拠に、弔辞ちゆうじで「浄土」という言葉はまず使いませんね。キリスト教の天国という言葉を使う方もいますが、たいていは「あの世」と言います。

「あの世」というのは仏教語ではありません。民間風俗語とでもいったらいいでしょうか。いずれの宗教用語でもなく、日本人が独自に使用した言葉です。

それにしても「あの世」というのは実に意味深長です。「死んだらどこに行くおつもりですか？」と訊かれた誰かが「あの世」と答えても、おそらく「あの世って、どの世ですか？」と質問する人はいけませんね。日本人なら誰にでも、「あの世」で通じるのです。「あなたもよくご存じなはずの、あの世ですよ」という、疑問の余地をはさまずに共通認識として通じるどころ。つまり「あの世」とは、それだけで誰もが昔いたなつかしい場所だと暗に示しています。

日本人の「あの世」に対して、通常の宗教が言っている死後の行き先は大抵なつかしい場所

ではありません。キリスト教が言う天国は、まだ誰も行ったことがない。イエスの復活を待つと一緒にしようというので、すでに亡くなった方々もみなじっと待っているわけです。

また仏教の浄土も行ったことがない、はじめての場所です。死んではじめて行ったことのないところへ行くというのは、相当勇気がいります。不安です。これに対して「あの世」は知っているところ。昔馴染んだ所。日本人にとっては、死とはどこか知らない場所に行くというよりは懐かしい場所に「帰る（還る）」ものなのでしょう。

「あの世」という言い方は、どちらかというと中国的なイメージに近いものです。中国の『老子』という本に「帰る」というイメージをはっきりさせてくれる言葉が載っています。

大なれば日に逝^こき、逝けば日に遠く、遠ければ日に反^{かえ}る

『老子』第二章の一節ですが、よく前後を読むと、逝くべき場所である「大」とは天地が発生する以前の、声もなく形もない世界。純名は「道」といい、「天下の母」のような場所だといえます。ちなみに『老子』では道を「玄牝」ともいい、「玄」とは女性器も意味しています。

人生、長いこと生きてきて、遠くまできたな、ここまで来たなという意識があればあるほど、最後はやっぱ「帰りたい」「戻りたい」。そこにはやはり、「母」のイメージも重なるという

ことです。

元いた場所に還ってゆくといふなら、それも「自然」として、受け入れやすかったのではないのでしょうか。日本人独特の「あの世」が、浄土を發展させるような形で日本人によって發明されたのですね。

「あの世」はこの世の地続き

私は臨済宗ですが、禪宗というのは、葬儀における引導作法の最後に「喝いっかつといふのをします。故人のこの世への未練、あるいは家族親族の故人への執着を断ち切るため、全身全霊をかけて「喝」と叫ぶわけです。

しかしお葬式に出頭していると、どうも周囲が「死んだと思っていない感じだなあ」と感じる人が多いですね。たとえば、弔辞などで「長いこと胆のうが悪くてビールなんか飲めなかつたでしょうから、あの世に行ったら、たらふく飲んでください」などと言ったりして、「あの世」をこの世の地続きに考えている。これは不謹慎ということでなく、それこそ日本人の伝統のつとつたスタンスではないかと強く感じてしまうのです。

そもそも地域によつては、火葬を先にやる葬儀もありますね。火葬して遺体が骨になつてから葬儀を行なうというのは、これは相当に文化的な行為です。「火葬までされてしまったら、

死の実感も薄れるだろう」と思ってしまったのですが、それでもやはり、まるで生きているときの延長のような感じで亡き人に語りかけ、見送ります。

こうなると、やはり先ほどの柳田國男と折口信夫の論争は、柳田國男のほうに軍配が上がるということでしょうか。少なくとも私も禅僧は、「一喝」でこの世の「個」まで破摧はさいしてしまいたいのですが、どうやら力不足なのでしょう。故人は遺族にとつて、さほど遠くないところで、これまでと似たようなことをする存在であり続けるらしい。それが日本人の集合的無意識を形成しているということなのでしょう。

ですから日本人の死生観、それは死ぬのではなくて、どこかへ行く。あの世へ行く、いや、還る。親鸞聖人は「横超わうちゆう」と言っています。横に跳とぶ、横に超える。ストーンと向こう側に行ってしまう。そして、そこそこちらは、どこかでつながっているという感覚が日本人には強いような気がします。

エネルギーの源へ帰っていく

我々僧侶はお位牌に戒名を書きます。その位牌の頭には「新婦元しんきげん」と書きます。「新たに、帰ります、元もとに」ということですね。新婦空とか新婦真という書き方もありますが、ここでは「新婦元」に絞って説明したいと思います。

「元」とは何かといいますと、「元気」です。しかし、ここでいう元気とは「今日も元気に頑張ろう」などというときの元気よりも少し意味が深い、「大元の気」です。

元気とは、もともと宇宙根源のエネルギーを意味します。エネルギーの本体から元気を分与されて、みんな元気に生きています。死というのは、気の満ちた器の寿命が尽きたことで、器の中身の残りの水を川にそいでそれが海に帰っていくように、分けてもらったエネルギーが元気の本体に帰っていく、ということなのです。

ちなみに、行くのか来るのが分かれるのは、性行為中の高揚時と同様です。日本人は「行く」と言う。中国人は「ライラ・ライラ（来了来了）」、アメリカ人は「coming」ともに「来た」と言います。これは余談ですが、このこととあの世に行く・帰るというのがどういう関係になるのか私にはよくわかりません。興味のある方がぜひ研究してくださいと思います。

いろは歌のテーマは「死とは何か」

日本人がもっていた「避る」という死生観は、浄土教をベースにした「往生」と組み合わせたり独自の発達を遂げました。その日本人の死についての思いを端的に表わしているものが「いろは歌」です。

戦後は小学校に入って文字を教わるときには完全に「いろはにほへと」ではなく「あいうえ

お」が使われるようになりましたが、今でもおそらくほとんどの人が知ってはいるでしょう。明治以降、廃仏毀釈の影響もあって次第に「あいうえお」への移行が進むのですが、やはり詠んで調子がいいし内容も深いですから、残っていくんですね。

いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむ

うゑのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせす

この「いろは歌」は「あいうえお」と違って、七五調が繰り返される「今様」の形の詠になっています。つまり意味のある歌なのです。しかし今、いや、昔の方々が寺子屋などで習ったときでもおそらく、意味はあまり教えられていないと思います。子供にはちよつと難しすぎますね。「いろは歌」というものは、「死とは何か」ということをテーマにした歌なのです。

「いろは歌」はもともと、「夜又説半偈」といわれる漢字一六文字の短いお経の翻訳です。さらに「夜又説半偈」というのは、もとは『大般涅槃經』の第一四卷「雪山偈」を歌にしたものといわれています。大本の『大般涅槃經』はとても古いお経で、「涅槃」と名の付く通り、お

釈迦さまの臨終を中心に記されたものです。

先にここで「夜叉説半偈」を解説します。以下が全文です。

諸行無常 是生滅法

生滅滅已 寂滅為樂

〔読み〕

諸行は無常なり。是れ生滅こししょうめつの法なり。

生滅滅し已をわつて、寂滅を樂なと為す。

「夜叉説半偈」は先述の通り、もとは『大般涅槃經』の第一四卷「雪山偈」です。雪山、つまりヒマラヤですが、お釈迦さまの前世、ヒマラヤで修行していた雪山童子時代の物語だということです。ストーリーは次のようなものです。

お釈迦さまが前世で雪山童子だったころ、ヒマラヤ山中で「死とは何だろう？」ということテーマに修行をしていると、夜叉が出てきて歌を歌い始めた。その歌詞は「諸行は無常なり。

これ生滅の法なり」というものでした。「これはもしかしたら、死のことを歌っているんじゃないか？」と思った雪山童子は、この部分は真理だけでも、どう生きたいかまでは言っていない。ぜひ続きを聞かせてくれと、夜叉に頼んだそうです。夜叉は「聞かせてもいいけど、聞かせたらお前を食べてもいいか」という条件を出します。夜叉は人間も食べてしまう化け物なのです。

「死についてわかるならば死んでもいい」と雪山童子は思い、「わかった」と答えて続きを聞くのです。そうして聞いた後半が「生滅滅已 寂滅為楽」だったわけです。

この「夜叉説半偈」という漢字一六文字の漢詩を平安時代に「いろは歌」に訳した人がいるのですね。空海が訳したと言われることも多いですが、実は諸説あるものの空海でないことは確かなようです。なぜかと言いますと、あとで詳しく説明しますが、「うゐのおくやまけふこえて」のところは「山越えの阿弥陀」のイメージ、つまり浄土教の影響が感じられるのです。ということは、この訳が作られたのは浄土教が一般に広まったあとと考えられますので、空海というのはあり得ない、ということになります。

訳はまさに神業だと思います。四七音、一度ずつしか使わずに、文法的な間違いもなく、訳した意味にも間違いがない。こんなことがなぜできたのか、本当に驚くべきことです。